

# シリア考古学文化遺産国際会議と 文化財梱包資材の提供に関する報告

西藤 清秀

International Syrian Congress on Archaeology and the Cultural Heritage,  
and Supply of Packing Materials for Cultural Heritage by JSWAA

Kiyohide SAITO

## 1. はじめに

日本の西アジア考古学は、シリアという地と人々によって育まれてきたと言っても過言ではない。その歴史は50年あまりになり、多くの日本の西アジア考古学研究者がシリアという地に根ざし、調査研究を通して親密な人間関係を構築してきた。しかし、シリアでは、2011年3月以来、未だ解決の糸口さえ見えない内戦状態が続いており、ISの侵攻も相まってますます内戦は複雑激化し、日々、多くの人々の生命が奪われ、母国を去らざるを得ない人々は増加の一途を辿っている。人々は長引く内戦に疲弊し、生活を継続する困難さに直面している。そして、この内戦の激化とともに平和の象徴であり人々の心の拠り所と言える文化遺産が無惨にも破壊され、さらに盗掘・強奪が頻繁におこなわれ、住民の基盤を否定しようとする行為が横行している。まさに人々は、心の中に存在する重要な柱を失っている。しかし、そのような中、シリアには自らの文化遺産を守ろうと日々必死に努力し、発掘調査を続けている多くの人々がいる。日本西アジア考古学会は、彼等のために何かできないかと考え、レバノン・ベイルートにおいてシリア文化財関係者のための「シリア考古学会議（正式名：シリア考古学文化遺産国際会議）」を開催するに至った。

## 2. 会議開催と梱包資材提供の経緯と経過

「シリア考古学会議」（最終的に「シリア考古学・文化遺産国際会議」）の開催は、2014年2月に中部大学・西山伸一とレバノン大学のジャン・アブドゥル＝マシーフ（Jeanine Abdul Massih）が奈良の橿原に来られた際、シリアの支援について話し合ったのが契機となった。内戦による文化遺産の無秩序な破壊や盗掘・強奪の行為に対し、UNESCO、ICOMOS等を含め世界の文化財に関わる組織や人々によって、シリアの文化遺産被災状況に関わる会議が世界各国で頻繁に開催されている。しかし我々3人は、そのような会議ではなく、シリアを支援できる学術的な会議をベイルートで開催する必要があるのではないかという意見で一致した。我々は、その会議がシリアで調査を実

施してきた外国調査団が自らの調査成果をシリア側へ提供する絶好の場となり、内戦後の復興時に大きな力を発揮すると思った。そして我々は、この考えを直ちにシリアの古物博物館総局博物館局長のアフマド・ディーブ（Ahmad Deeb）に伝えたとこ、大いに賛同を得た。その後、西藤は2014年5月にユネスコ主催の「シリア文化遺産の危機に関する会議」に出席し、招聘されていたシリア古物博物館総局総裁マアムーン・アブドゥルカリーム（Maa-moun Abdulkarim）に会い、我々が検討している「シリア考古学会議」について伝えたとこ、是非に開催して欲しいとの意向が示された。

2014年10月、西藤はベイルートに赴き、アブドゥル＝マシーフとディーブと会い、3人で直接、会議の開催内容を大まかに決めた。会議発表対象者は、2010年当時、シリア国内で調査団を編成していた代表者とし、外国からの調査団約80隊、シリア側調査団約40隊の計120隊の代表者とした。2015年1月にシリア古物博物館総局が調査団代表者リストを作成してアブドゥル＝マシーフと西藤に送付し、双方で整理を行ない、同年4月頃アブドゥル＝マシーフから各調査団に連絡することとした（実際は7月に送付。後述）。開催経費に関してはUNESCO等にスポンサーを頼まず、レバノンのシリア調査団と日本西アジア考古学会が準備することを確認した。実行委員会はレバノン大学ジャン・アブドゥル＝マシーフ（Director of Archaeological Mission of Cyrrhus）、奈良県立橿原考古学研究所・西藤清秀（Director of Archaeological Mission of Palmyra / 日本西アジア考古学会会長）、筑波大学・常木晃（Director of Archaeological Mission of Tell el-Kerkh）、中部大学・西山伸一、そして協力者としてレバノン古物総局M.サルキース・エル＝ホウリー（Sarkis el-Khoury）総裁で構成することにした。開催時期は2015年12月上旬、開催期間は3日間（発表者が多く4日間に変更）、開催場所はレバノン・ベイルート市内のホテルとし、約100～200人の出席者を想定した。発表者として調査団代表者が来られない場合は代理者可、発表時間は15

分(質疑応答を含む20分に変更)、内容はあくまで調査成果とした。

会議に関わる経費は、以下のように取り決めた。渡航費等の交通費について、外国調査団責任者は自国とベイルート国際空港の往復の費用を各自で支払う。但し、空港より宿舎となるホテル・発表会場との往復の交通費については実行委員会が負担する(各自対応に変更。後述)。シリアからの調査団責任者およびシリア人会議参加者の交通費は、実行委員会が負担する。外国人会議発表者およびシリア人会議参加者について、宿泊費3泊分(4泊分に変更)(外国人発表者のみ自費に変更。後述)と会議中の食費(シリア人には日当を支払って対処、外国人発表者は各自対応に変更。後述)は実行委員会が負担する。そして、その他の経費として会場費、通訳、予稿集などを含め総額75,000米ドルあまりの見積もりをたて、全て日本側で準備する覚悟をし、帰国した。

翌11月に招集した日本西アジア考古学会役員会において「シリア考古学会議」の開催案を紹介し、経費についても報告した。この会議については日本西アジア考古学会の常木晃・山内和也両副会長には事前に相談しており、彼等は公的資金獲得のために各機関と水面下で交渉してくれていた。しかし、2015年1月のISによる日本人質事件は、公的機関による西アジア関連事業に対する援助を躊躇させる結果となり、公的援助を期待して開催の準備を進めていた「シリア考古学会議」にも影を投げかけた。しかし、日本西アジア考古学会は、2015年2月21・22日の筑波大学主催のシンポジウム「シリア内戦下の文化遺産：その危機と保護にむけて」において、西藤による「シリアの文化遺産に関する日本西アジア考古学会の取り組み」の報告の中で「シリア考古学会議」の開催に向けた準備をしていることを初めて公表した。

3月16日、筑波大学・常木晃による「シリア・アラブ共和国における文化遺産被災状況調査」に関連して開催された「ベイルート専門家会議」に西藤と西山が出席した際、「シリア考古学会議」開催の意向を示すと、シリア古物博物館総局アブドゥルカリーム総裁からこの会議で調査成果の情報交換ばかりでなく、文化遺産の将来に向けた討議を加えて欲しいという要望が出されたため、その方向で会議のプログラム編成を考える旨を伝えた。さらに、この会議の中でディープ博物館局長から、博物館収蔵品を避難させる際の梱包に日本の和紙が非常に有用であると聞いているので入手を希望する、という旨の発言があった。この「ベイルート専門家会議」の翌日、アブドゥル＝マシーフ、ディープ、西藤、常木、西山が「シリア考古学会議」についての打合せを行ない、4月に予定していた各調査団への開催案内の送付を7月にずらし、9月末に発表の応募

を閉め切ることや、海外の発表者のベイルート滞在に関わる費用は各自で準備してもらうことへの変更を確認した。そして、開催案内送付およびその後の発表プログラム、要旨集の編集には西山が加わることを確認した。しかし、会議開催経費について全く目処が立っていないため、全国から寄付を募るという案に至った。寄付募集を学会として実施するためには役員会に諮り、了承を得る必要があるため、帰国後4月10日役員会に会議開催と博物館収蔵品の梱包作業に関わる資材提供目的の寄付募集案を諮り、了承を得た。さらにこれについては、会員の承認も必要なことから、6月14日、名古屋大学で開催した第20回日本西アジア考古学会総会に議案の一つとして挙げ、会員の採決を仰ぐことにした。幸いに大多数の会員の賛同を得て、会議開催に向けての寄付を募ることが採択された。この総会の様子はNHK、読売新聞社等によって取り上げられたため、学会事務局に寄付の問い合わせがすぐに寄せられた。

学会総会での採択を受け、準備をしていた寄付を募るチラシの作成と寄付をしやすくするための郵便振込用紙の手配も行った。そして、「シリア考古学会議」開催に賛同いただいた写真家の吉竹めぐみ氏より写真集『ARAB』200冊の寄贈を受け、1万円以上の高額寄付者に先着でこの写真集1冊を進呈する旨を付記し、7月上旬よりチラシ配布を開始した。

会議実行委員会は、最終的に7月16日付けで会議の正式名称を“International Syrian Congress on Archaeology and Cultural Heritage (ISCACH): Result of 2000 to 2011”、会期は12月3～6日の4日間とし、開催案内を送付した。しかし、安全上、開催場所はベイルートとだけ記し、2回目の案内で会場となるホテル名を知らせることとした。同時に、2015年9月18日を期限として口頭発表とポスター発表の募集を開始した。応募に際しては、調査団名、所属、調査遺跡名、口頭発表かポスター発表か、発表題目の明記と、英語かアラビア語による発表要旨(200語)の送付を条件とした。なお、この時点で政府関係者が実行委員会には関わらない方がよいという判断から、協力者として名を挙げていたレバノン古物総局総裁を外すことにした。

この1回目の会議の開催案内の冒頭には、以下の趣旨文を付した。

「2012年以来、シリアにおける考古学的な調査は、ほとんど中断した状態である。多くの海外の組織や研究機関がシリアの危機に瀕する考古学遺跡を含む文化遺産に関する会議、シンポジウムやワークショップを開催している。しかしながら、そのような集まりではほとんど2011年までに実施された調査成果に焦点を当てていない。我々は、シリアにおける文化遺産の破壊にかかわる危機的な情報に触

れるにつれ、全人類の歴史と知識に関わる遺跡が永久に消失していることを理解している。多くの遺跡がシリアや海外の研究者によって調査されているが、今こそ学術集団ばかりでなく一般社会が知識を分かち合う時である。この会議を通して、我々はシリアの文化遺産の保護と将来の復興に向けた文化的かつ科学的な対話を専門家間で強力に実施することを希望する。この会議の最も重要な目的は、シリアの考古学関係者と専門的な知識を分かち合うことにある。その達成のために本会議は、シリア考古学関係者が最も参加しやすいバイルートで開催する。上記の目的のもと、我々は、国際会議を開催し、2000～2011年にシリアで活動したすべての考古学調査団から口頭発表やポスター発表を募集する。我々は、シリアおよび海外の全ての調査団代表者にこの案内文を届けることにする。」

以上の案内状は、アブドゥル＝マシーフと西藤の名で調査団代表のもとに送付した。この案内に対して即座に反応があり、会議への賛同や異議を唱える双方交々であった。特にヨーロッパの調査団からは、この会議の必要性やなぜバイルートで開催するのかといった質問が寄せられた。これらに対しては趣旨文に沿い実行委員会から返事を送った。こうした質問には、日本西アジア考古学会がレバノンでシリア考古学関係者支援の会議を招集することへの驚きと嫉妬が見え隠れしていると感じた。裏を返せば、この会議を開催する意味の重大さを示していると理解した。

各調査団代表者への呼びかけから2ヶ月半、2週間あまり応募期限を延長し、9月末に応募を締め切った。その時点での発表予定者は69名、うちシリア在住者24名、在外シリア人6名であった。10月12日、発表者宛に登録確認の連絡を送り、10月24日に会場となるバイルート・ハムラ地区クレマンソー通り (Clemenceau Street) にあるゲフィンール・ロタナ・ホテル (Gefinor Rotana Hotel) の名を記した2回目の案内を送付し、11月10日に会議プログラムの送付を行なった。調査団代表者への呼びかけからプログラム送付に至る約4ヶ月の間に、シリアおよびシリアに関わる衝撃的な事件が連続して起こった。まずISによってハーレド・アサッド (Khaled Asa'ad) 前パルミラ博物館館長が殺害され、次いでパルミラの主要建造物であるパールシャミン神殿、ベル神殿、エラベール・ヤムリコ・アテナタン・カトーを含む10基の塔墓、そして記念門が8月半ばから9月半ばにかけて破壊された。これらISの暴挙に対しては、世界中から怒りの声が起こった。さらに9月から今も続くヨーロッパへのシリア難民の流入問題、11月13日のバイルート、翌14日のパリでの爆弾テロ事件は、会議参加者に少なからず動揺を与えた。日本で我々が集めた会議開催のための寄付金を難民支援に使うべきだという意見や、この時期にバイルートで会議を開催

する危険性を強調し、取り止めるべきとの声が、ヨーロッパ研究者から上がった。だが実行委員会は、バイルートにいるアブドゥル＝マシーフや在レバノン日本大使館と密な連絡を取り、バイルートの最新の情報を得て開催できる確信を抱くことができ、必ず会議を成功させようと決意を新たにした。しかし、バイルートやパリでのテロ事件の影響で、参加予定者の中には国情によりキャンセルせざるを得なくなった研究者も出たことは残念な結果であった。

さて、開催にあたり最も重要な経費に関しては、寄付をお願いするチラシを公私問わず配布すると共に、新聞社各紙がこの会議の件と寄付に関する記事を取り上げて掲載してくれたお陰で、順調に集まり始めた。しかし、パルミラでの惨事の連続に、支援・寄付して下さる方々が増えたのでは、と考えると胸が痛んだ。そして、全国からいただいた寄付は、10月末日で500万円余りに達した。但し、今回のシリア文化財支援は会議開催と文化財梱包資材提供の2本立てであったので、資材提供のみをご指定の寄付もなかった。したがって、まだまだ会議開催に十分な金額ではなかった。幸いにも、10月14日付けで文化庁伝統文化課文化財国際協力室から事業費290万円余りの「平成27年度文化遺産保護国際貢献事業(専門家交流)実施委託業務」が公募されていることを知った。それには実施業務国がシリア・アラブ共和国と明記されていたため、すぐに応募しようとしたが、日本西アジア考古学会は任意団体のため、この公募事業には応募できないことが分かった。そこで、西藤の所属する奈良県立橿原考古学研究所が応募することになり、手続きを行なった。結果、11月中旬に採択の連絡を受け、会議開催が可能な経費はやっと整った。

開催の事前準備に向け、実行委員会の西藤、西山と学会員の上杉彰紀が11月27日(金)に日本を出発し、翌28日(土)バイルートに到着。その後、開催日までアブドゥル＝マシーフ、西藤、西山で協議しながら準備を行なった。30日(月)にはUNESCOバイルート事務所での会議に出席していたシリア側協力者であるディーブが、会議で使用するバッグ、ノート、ボールペン等をダマスカスで調達し、持参してくれた。12月2日(水)には会場となるゲフィンール・ロタナ・ホテルのLevel Cにポスターを貼った。また、実行委員会の常木、会議協力者である吉竹めぐみ、間舎裕生、発表者の山田重郎が日本で印刷した予稿集を分担して持参した。

2日18時にプレスコンフェレンスを会議会場にて実施した(図1)。レバノンや日本の報道陣が集まり、アブドゥル＝マシーフ、西藤、アブドゥルカリム総裁が会見に臨み、開催趣旨やシリアの現状を説明した。そこで強調したのは、今回の会議がシリアの被災状況の情報交換を行なう場ではなく、あくまでも学術的な調査成果の情報交換



図1 プレスコンフェレンス風景  
(左より西藤、アブドゥル=マシーフ、アブドゥルカリーム総裁)



図3 会議の様子 (会場風景)



図2 薄葉紙の贈呈



図4 会議の様子 (コーヒーブレイク)

を行なう場であることだった。会見の最後に、要望に応じて日本から持参した和紙（日本の博物館・美術館で日常的に収蔵品の保護紙として使用されている薄葉紙400m4本）をアブドゥルカリーム総裁に手渡した（図2）。量としては少ないが、少しでもシリアの文化財の保全に役立つのであれば、寄付して下さった方々にも喜んでいただけるのではないかと思う。ディーブ博物館局長によれば、早速アレppo博物館の収蔵品をダマスカスに運んで再梱包するのに使いたいとのこと。今後も機会を見つけて提供できればと思う。

日本西アジア考古学会では、2日の会議開催の記者発表に伴い、日本時間の3日0時に会議のプログラム、予稿集、正誤表を学会ウェブサイトアップロードし、世界のどこからでも誰もがこの会議の情報を入手できるようにした。

### 3. 会議の内容

会議では、12月3日(木)～6日(日)の4日間、ホテル2

階のLevel Cのホールを会場に、口頭発表、ポスター発表、さらに出版物の展示を行なった。発表は4日間で計58本、地域別にセッションを組んだ。ポスター発表は19本で、そのうちシリア古物博物館総局の調査関係が3本、文化遺産保全活動を伝えるポスターが5本あった。出版物としてはシリア古物博物館総局出版物、フランス近東考古学研究所(IFPO)出版物、日本のデリエ洞窟、パルミラ、テル・エル=ケルクの調査概報等が展示された。

初日となる3日は午前8時から受付を開始し、事前の参加登録者85名には準備した名札と予稿集の入ったバッグを手渡した。また、飛び込み参加も記名によって受付し、予稿集を配布した。最終的に参加者は200名余りに上り、持参した200冊の予稿集は全て配布された。会場には続々と人が集まり、懐かしい顔が揃った（図3、4）。4日間の会議の全体的な司会・進行は、日本西アジア考古学会が主催することから常木晃、西山伸一、間舎裕生が行なった。9時よりオープニング・セッションを開始し、初め西藤が開催挨拶、次にアブドゥル=マシーフが会議趣旨説明を行



図5 アサッド氏への追悼



図6 日本西アジア考古学会主催夕食会

なった。

9時40分、パルミラ・セッションから調査研究発表に移った。進行役を務めたアブドゥルカリーム総裁が先ず故ハーレド・アサッド前パルミラ博物館館長への追悼の言葉を述べ(図5)、全員で1分間の黙祷を捧げた。その後、西藤を皮切りに発表がスタートした。西藤は日本隊のパルミラにおける調査の歴史を発表し、ポーランド隊のグジェゴシュ・マイヘレク(Grzegorz Majcherek)がパルミラの調査中の教会について話をし、続いてトマーシュ・ワリシュエウスキ(Tomasz Waliszewski)がパルミラでのオリーブオイル製造について発表を行なった。持ち時間は各20分であったが、熱気あふれる発表は時間をオーバーし、午前後半のイドリブ・セッション後のポスター発表は翌日に延期されることになった。

イドリブのセッションは6発表が行われ、J.-M.ル・タンソレール(Le Tensorer)が進行役を務めた。1番目はアブドゥルカリームが北シリアの古代村落群(Dead Cities)の考古学および建築学的研究の発表を行ない、続いて常木晃が新石器時代テル・エル＝ケルク遺跡の調査について発表した。3番目は2004～2010年のエブラ遺跡の成果についてパオロ・マッティエ(Paolo Matthiae)が発表する予定であったが、急に出席できなくなり次の発表者のフランシス・ピノック(Francis Pinnock)が代読をした。続いて同氏がエブラの遺跡公園計画を話した。5番目のステファニア・マッツォーニ(Stefania Mazzoni)は、後期青銅器時代と鉄器時代のテル・アフイス(Tell Afis)について発表を行ない、最後に西山伸一が鉄器時代のテル・マストゥーマの発掘調査成果を紹介した。

午後の前半はハッサケ・セッションであるが、発表者が多いため2部に分け、第2部は3日目の5日に実施した。第1部は5発表が予定されていたが、アメリカからの参加予定者フランク・ホール(Frank Hole)がパリでのテロ

の影響により出席を取りやめ、発表もキャンセルとなった。このセッションの進行役は、予定していたマッティエからフランシス・ピノックに替わった。1番目の発表は、ドミニク・ボナーツ(Dominique Bonatz)がテル・フェヘリーエ(Tell Fekheriye)の調査成果と遺跡近くにあるクルド人町ラス・アル＝アイン(Ras el-Ain)の近況を報告し、2番目はピョートル・ビエリンスキ(Piotr Bielinski)がテル・アルビド(Tell Arbid)について発表、3番目にシリアのムハンマド・ファフロー(Mohamad Fakhro)からテル・ハラフ(Tell Halaf)の調査についての報告があり、最後に出席できなくなったアメリカのジョルジョ・ブッチェラーティ(Giorgio Buccellati)のテル・モザーン(Tell Mozan)の発表がシリア人のサーメル・アブドゥル＝ガフル(Samer 'Abdel Ghafour)によって、ブッチェラーティ氏の音声と映像を使用して行われた。

午後後半はアレppo・セッションであるが、このセッションも発表者が多く、2部に分けられ、第2部は2日目の4日に行われた。K.バートル(Bartl)が進行役を務めたアレppoセッションの第1部は4発表からなり、最初に日本から参加の赤澤威がデデリエ洞窟の調査の発表を行ない、続いて現在筑波大学に属しているシリアのユーセフ・カンジョウ(Yousef Kanjou)がテル・カラーメル(Tell Qaramel)の調査について発表した。3番目はイタリアのセレーナ・マリア・チェッキ(Serena Maria Cecchi)が後期アッシリアのアルスラン・タシュ(Arslan Tash)の発掘調査について報告し、最後にベルギーのガイ・ビュネンス(Guy Bunnens)がテル・アハマル(Tell Ahmar)の調査成果を紹介した。結局、初日は予定より30分延びて最後の発表が終わった。

この日の日本西アジア考古学会主催の夕食会は20時30分に開始された(図6)。開会の挨拶もなく、各自が自由に席につき、銘々が歓談するという形式をとったが、非常

に和んだ雰囲気の中で会は進んだ。参加者が旧知の友と会い、それぞれの友人の消息を確認しあう場面を見て、誰からも会議に参加できた喜びが感じられた。この夕食会には、現在ヨルダンのアンマンにあるシリア日本大使館から松本太・臨時代理大使が参加して下さり、シリアのアブドゥルカリム総裁等が大使と情報交換できたことは非常によかった。閉会まであちこちで話が華が咲き、互いに写真を撮り合い、非常に盛会であった。

12月4日(金)の第2日目は、ホムス、ラッカ、ハマのセッションが午前中に行われた。ホムス・セッションは3発表からなり、R. ピーロボン・ブノワ (Pierobon Benoit) が進行役を務め、最初にミシェル・アル＝マクディシ (Michel al-Maqdissi) がカトナ (Qatna) 遺跡について発表を行なった。次に、スイスのジャン＝マリー・ル・タンソレル (Jean-Marie Le Tensorer) がエル＝コウム (El Kowm) 地域の前期旧石器調査について報告した。最後は、同じくスイスのドロタ・ヴォイチャク (Dorota Wojtczak) がエル＝コウムのフンマル (Hummal) 遺跡の調査成果を発表した。

ラッカ・セッションは2発表からなり、G. クラーク (Clarke) が進行役を務め、ドイツのドロテー・ザック (Dorothee Sack) がルサーファ (Resafah) 遺跡の発表を行ない、シリアのアイハム・アル＝ファフリー (Ayham al-Fakhri) がテル・フウェイジェト・ハラウエ (Tell Hwejet Halaweh) の発掘調査について発表した。

午前最後のハマ・セッションは7発表の予定であったが、シリア人による1発表がキャンセルとなった。進行役はP. ビエリンスキが務め、最初にカリン・バートル (Karin Bartl) がハマ地域の遺跡分布調査の結果を、2番目にフランスのベルナルド・ゲイエ (Bernard Geyer) が西シリアとレバノンの旧石器時代の生態と居住について発表を行なった。次にシリアのナーズル・アワード (Nazir Awad) が紀元前3千年紀のアル＝ラウダ (Al Rawda) 遺跡について、4番目にフランスのマティルド・ゲラン (Mathilde Gelin) がアパミアにあるカラアト・アル＝ムディーク (Qalaat al-Mudiq) の過去と現在について報告した。5番目にヘイサム・ハサン (Haytham Hassan) のマシヤフ (Masyaf) 城の発表をフマーム・サアド (Houmam Saad) が代読した。最後にシリアのアブドゥル＝ワッハブ・アブー・サーレフ (Abdel Wahab Abou Saleh) がテル・マクスール (Tell Maksour) について発表し、午前のセッションを終えた。

午後はアレppo・セッションの第2部とラタキア・セッションの第1部が行なわれた。アレppoのセッションは5発表からなり、進行役はミシェル・アル＝マクディシが務めた。最初の発表はオーストラリア隊によるセレウコス朝

のジュベル・ハーリド (Jebel Khalid) について、次に今回の会議開催の立役者であり実行委員会メンバーであるレバノンのジャン・アブドゥル＝マシーフがヘレニズム期の代表的な遺跡であるキュロス (Cyrrhus) 遺跡の調査成果を紹介した。3番目はシリアのアンマル・アブドゥルラフマーン (Ammar Abdulrahman) がローマ時代のテル・ジンダリス (Tell Gindaris) について発表し、次にフランスのジュスティヌ・ガボリ (Justine Gaborit) がヒエラポリス／モンベジ (Hierapolis/Menbij) での考古学調査の内容を述べた。最後にフランスのマリー・オディル・ルセ (Marie-Odile Rousset) がヘレニズム期のキンナスリーン (Qinnasrin) の発掘調査について紹介した。

後半のラタキアの第1部は5発表からなり、進行役はS. マッツォーニが努めた。最初の発表はミシェル・アル＝マクディシが後期青銅器時代のラス・イブン・ハーニー (Ras Ibn Hani) の調査について発表し、続いてシリアのアフマド・ディーブが後期青銅器時代のテル・ナハル・アル＝アラブ (Tell Nahr al-Arab) の調査成果を発表。3番目にレバノンのレイラ・バドル (Leila Badre) が鉄器時代のテル・カゼル (Tell Kazel) について報告、4番目にフランスのヴァレリー・マトイアン (Valérie Matoïan) がフェニキアを象徴するウガリット遺跡 (ラス・シャムラ Ras Shamra) の発掘成果を述べ、最後にシリアのホザマ・アル＝バフルール (Khozama al-Bahloul) のウガリット遺跡の城砦についての調査内容が代読で紹介されて、第2日目の会議を終了した。

またしても時間を押す結果となったが、皆、多くを伝えたい気持ちが前面に出ているからだろう。なお、午前のセッション中にシリアからアブドゥルカリム総裁に連絡が入って翌日帰国することになり、最終日に予定していた参加者全員による記念撮影を午前のセッション終了時に行なった (図7)。残念ながら連絡が届かなかった人もいて、90名ほどが記念撮影に参加した。

12月5日(土)の第3日目は、午前中がハッサケの第2部とダマスカス・セッション、そしてポスター発表が行なわれた。ハッサケの第2部は4発表あり、進行役を常木晃が務めた。最初はシリアのスレイマーン・イリヤース (Suleiman Elias) が紀元前6千年紀のテル・シャイール (Tell Sha'er) の発掘調査成果を述べ、続いて日本の西秋良宏が新石器時代の集落テル・セクル・アル＝アヘイマル (Tell Seker al-Aheimar) の調査について発表、さらに日本の山田重郎が中期アッシリアのテル・タバン (Tell Taban) を紹介した。4番目に予定されていたイタリアのラファエラ・ピーロボン・ブノワ (Raffaella Pierobon Benoit) は体調が悪く、午後1番目に変更となる。そのため繰り上げて、フランスのジョニー・バルディ (Johnny



図7 参加者集合写真

Baldi) がテル・フェレス (Tell Ferres) 調査から北メソポタミアの初期都市社会について紹介した。

ダマスカス市内のセッションは、6 発表の予定であったが、フランスからの参加者がキャンセルになり、5 人すべてシリア人の発表となった。進行役は D. ザックが務めた。最初の発表では、アフマド・タラクジ (Ahmad Taraqji) が青銅器時代のテル・サッカ (Tell Sakka) の調査について報告した。2 番目はリマ・ハワム (Rima Khawam) が PPNB 期のテル・アスワド (Tell Aswad) の調査について述べ、3 番目にフマム・サアド (Houmam Saad) がダマスカスのローマ時代のジュピター神殿における調査成果を発表した。4 番目はエドモンド・エル＝アッジ (Edmond El-Ajji) が内戦下でのダマスカス城の発掘調査成果を発表し、最後にアフマド・ダリー (Ahmad Dally) がオールド・ダマスカス内のスーク・アル＝サーガ (Souk al-Sagha) で発掘された遺構の遺跡博物館構想を紹介した。このセッションでは、3 発表が内戦下の 2012 年以降の発掘調査成果だった。その後、ポスター発表が行われた。調査に関わるものが 15 件、シリア古物博物館総局の取り組みに関わるものが 5 件だった。

午後のセッションはダラア・スウェイダとダマスカス市外域を対象とした。本セッションは 6 発表が行なわれ、西藤が進行役を務めた。最初は午前のハッサケ 2 セッションから変更となったイタリアのラファエラ・ピーロボン・ブノワがテル・バリ (Tell Barri) の紀元前 3000 年～紀元後 900 年の歴史を発掘調査成果を踏まえて発表した。次に、ダラア・スウェイダセッションの 1 番目としてフランスのピエール・マリー・ブラン (Pierre-Marie Blanc) がナバタイの都市ボスラ (Bosra) の調査成果を発表し、2 番目に同じくフランスのフランク・ブレメール (Frank Braemer) がスウェイダのカラサ (Qarassa) 遺跡につい

て旧石器時代から鉄器時代の遺構の変遷を紹介した。3 番目のアフマド・ディヤブ (Ahmed Dyab) は、ダラア地域の先史時代遺跡の分布調査の成果を発表し、4 番目にカーセム・アル＝ムハンマド (Qasem al-Muhammad) が青銅器時代のテル・アル＝アシュアリー (Tell al-Ash'ari) について述べた。最後はガージー・アロロ (Ghazi Alolo) がサファー (Safaitic) 文字の分布調査の成果を紹介した。

ダマスカス市外域セッションでは 4 発表が行なわれ、進行役は V. マトイアンが務めた。最初の発表では、シリアのマフムード・ハムード (Mahmud Hamud) が紀元前 2000～700 年の遺構を中心としたテル・アル＝フミラ (Tell al-Humira) の調査成果を述べた。2 番目にシリアのガーダ・スレイマン (Ghada Suleiman) が紀元前 6～3 千年紀のテル・アル＝バハリ (Tell al-Bahari) の発掘調査成果を報告し、3 番目にシリアのウルード・イブラーヒム (Woroud Ibrahim) がアル＝カルヤタイン (Al-Qaryatayn) の聖エリアン (St. Elian) 教会の調査について発表した。最後に、シリアのナダ・サルキース (Nada Sarkis) がサダド (Sadad) の聖セルギウス (St. Sergius) 教会と聖バックス (St. Bacchus) 教会のフレスコ画について発表を行ない、3 日目が終了した。

12 月 6 日 (日) の最終日は、シリア側からの明るいうちに国境を越えたいという希望により、午前で終えるプログラムを組んだ。この日のセッションは、デルズールとラタキアの第 2 部、およびシリア側から要請のあった「特別セッション：シリア文化遺産の将来を考える」であった。デルズール・セッションは 3 発表あり、進行役は G. ビュネンスが務め、最初の発表者フランスのシルヴィ・ブレトリ (Sylvie Bletry) はハラビヤ＝ゼノビア (Halabiya-Zenobia) の墓地について報告した。次に、シリアのシャーケル・アル＝シュビーブ (Shaker Al Shbib) がビザンチ



図8 特別セッションの様子

ンの要塞都市であるタル・アッ＝シーン (Tall as-Sin) における発掘調査について報告した。最後に、シリアのヤロブ・アル＝アブドゥッラー (Yaarob Alabdullah) がビザンチン都市テル・アル＝カスラ (Tell al-Kasra) について発表した。

ラタキア・セッション第2部は、当初のプログラムでは3発表であったが、前シリア古物博物館総局総裁バッサム・ジャムース (Bassam Jamous) の発表が追加されて4発表となった。このセッションの進行役はF.ブレメールが務め、最初の発表ではシリアのマスウード・バダウィー (Massoud Badawi) が後期青銅器時代のテル・トウェイニ (Tell Tweini) の発掘調査成果を報告した。2番目に、シリアのヤーセル・ユーセフ (Yaser Yusef) によって、フェニキア期の遺跡として有名なアムリート (Amrit) の中でローマ時代のアブー・アフサ (Abu Afsah) 墓地の調査が主に紹介された。3番目は、ハンガリーのバラージュ・マジョル (Balazs Major) がアル＝マルカブ (Al-Marqab) 城の総合的な調査研究成果を紹介し、最後にバッサム・ジャムースからラタキア周辺の発掘調査についての報告があり、今会議における各調査団の全ての発表が終了した。

会議最後の「特別セッション：シリア文化遺産の将来を考える」では、アフマド・ディーブ、リナ・クティエファン (Lina Kutiefan)、日本から西藤、UNESCO ベイルート事務所からクリスティナ・メネガッツィ (Christina Menegazzi) が基調報告をした (図8)。ディーブがシリア国内の遺跡の現状紹介、クティエファンはレバノン考古局との共同による文化財流出の防止活動として、文化遺産の記録化を説明した。次いで西藤が各国の調査隊が情報共有する必要性を説き、一眼レフ・デジタルカメラを活用した文化財の梱包前の3次元化、遺跡の3次元航空レーザ計測の活用、ベル神殿の3次元計測の結果と再現への写真の

提供を呼びかけた。最後にメネガッツィが、インベントリーやドキュメンテーションなど、UNESCOの取り組み、インターポールとの協同による不法取引対策などの取り組みを報告した。

その後会場から5人のコメントを受けた。

・カリン・バートル (ドイツ考古学研究所/シリア遺産アーカイブ・プロジェクト Syrian Heritage Archive Project) ……ドイツ考古学研究所とベルリンのイスラーム文化博物館が協同で進めている所蔵する資料のアーカイブ化。

・リンダ・アルバートソン (Lynda Albertson) (アルカ [芸術に対する犯罪研究協会] 代表 CEO of Association for Research into Crimes against Art: ARCA) ……シリアの流出文化財に関する専門家たちの国際的な協力を提案。

・フランシス・ピノック (ローマ大学) ……将来の学生の教育が問題。重要な文化遺産はブラックマーケットを通して出回っているため、報道には現れない。現在のシリア文化財考古総局を専門家たちがサポートしていくことが大切。シリア文化遺産の伝統を守り、イラクと同じような轍を踏まないようにすること。

・フランク・ブレメール (シーリーン・インターナショナル・シリア文化遺産保護プロジェクト [shirin] / ニース・ソフィア・アンティポリス大学/フランス国立科学研究センター [CNRS]) ……シリア文化遺産に関わった専門家 (Scientific Community) は、国際的な協力体制を創り出す責任があるのではないかと。「シーリーン」はこの事例の一つ。

・ピョートル・ビエリンスキ (ワルシャワ大学) ……出版に関する意見。この危機の期間にできるだけそれぞれの調査団がもつ情報を出版し、専門家たちに提供するだけでなく、一般にも公開すること。出版情報の交換をシリア考古学文化遺産国際会議 (ISCACH) などの団体がリードするのも一つの考えである。

以上のコメントの中で、将来のために学生の教育の重要性、シリアの文化財に関わった人間のネットワーク作り、調査団の速やかな出版物作成など示唆に富んだ指摘をいただいた。

最後に常木・日本西アジア考古学会副会長とアブドゥル＝マシーフが閉会の挨拶をし、会議の全ての日程を終了した。会場は満場拍手喝采、そして、別れを惜しみながら再会を誓う挨拶が会場中で交わされた。シリア人の参加者はほとんどが大型バスに乗り合わせて帰るが、明るいうちに国境を越えたいとの要望もあって、慌ただしい別れとなった。何か心残りがあるようにも思えたのは、私だけであっただろうか。日本人参加者は全員揃って、ホテルの正面玄

関でシリア人を乗せた大型バスを見送った。誰もがこのバスに乗れば共にダマスカスに行けると思ったに違いない。

#### 4. おわりに

シリアの文化財支援事業を計画して約2年、シリア考古学・文化遺産国際会議の開催実現と博物館収蔵品梱包材の提供という事業を成し遂げることができ、日本西アジア考古学会にとって学会史に新たな1ページを加えることができた。また、世界や日本国内へ、我々学会の存在を認知してもらえる良き機会となった。そして、忘れてはならないのは、この事業が330余名の寄付をしてくださった皆様の支援があったからこそ実行できたということであり、学会を支援してくださった方々とまさに一体になって進めることができた事業であった。

2011年のシリア内戦の激化から、UNESCOをはじめとした多くの組織や機関が、シリアの文化遺産危機の状況についての会議をアブドゥルカリーム総裁はじめシリア古物博物館総局の代表者を招いて開催されてきた。このような会議は、確かに世界にシリアの文化遺産が置かれている状況を知ってもらうという点で非常に重要ではある。しかしながら私は、シリアにおいて日々破壊される文化遺産の情報収集や内戦下での発掘調査に従事している文化財関係者にとって、世界各地で開催されているシリアの文化遺産危機・破壊報告会は、果たして支援になっているのかと考えていた。そんな時、中部大学・西山伸一を介してレバノン大学のジャニン・アブドゥル＝マシーフと出会い、シリアで発掘調査に従事していた者としてシリアの文化財・文化財関係者に何ができるのかを話し合う機会を得た。そこで、3人の思いは、シリア文化財関係者と調査成果の情報交換する場をシリア人が行き来可能なレバノンのバイルートを設けることが一番の支援になるという意見で一致した。そうすれば、シリア文化財関係者の文化財保全へのモチベーションを少なくとも維持してもらえるだろうし、外国調査隊の成果を共有することは内戦終了後の遺跡の復興に必ず役立つと考えた。実際、今回の会議に31名のシリア人文化財関係者がシリア本国から参加し、参加者全員が達成感と満足感を抱いて帰国したことは間違いない。2015年3月にバイルートでアブドゥルカリーム総裁が口にした「我々を忘れないで欲しい」という言葉の意味することは、何らかの接触を保っていて欲しいということだと思う。経済的な支援以上に、シリア文化財関係者が文化財保全のためにモチベーションを保ち続ける原動力になるの

は、こういった会議を開くことなると我々は痛感した。また、海外の研究者にとっては、2011年以降シリア国内で実施されている発掘調査の内容を知ることができ、悲惨な状況にも関わらず、文化財を守り、調査を進めているシリアの人々の努力を知る重要な機会となった。さらには海外に難を逃れた7名のシリア人が、31人の元同僚と久し振りに会う機会にもなり、両者にあった心のわだかまりが僅かでも解消されたのであれば、これほどうれしいことはない。

会議での発表時間は、20分という短い時間であったが、多少の延長はあったものの各発表者は簡潔にまとめて発表していた。シリア人の発表については彼らにとって久し振りの機会であったのだろう、皆熱く語っていたのが印象に残っている。会議最後の「特別セッション：シリア文化遺産の将来を考える」において、西藤が少々粗いながらも3次元計測によるベル神殿の再現画像を映し出した時、皆が驚きの声を上げ、シリアの参加者からはたくさんの感謝の言葉をいただいた。この時、本当に会議を開催した甲斐があったと思えた。

期間中にアブドゥルカリーム総裁は、このような会議が毎年開催されることを望み、経費に関してはEU等に働きかけると述べられた。そして、開催にあたっては是非、日本西アジア考古学会に協力して欲しいとのことだった。毎年開催は少し難しいと思われるが、今後、シリア側と連絡を密に取りながら、彼らの希望を実現できる方法を模索する必要性を感じた。

また、日本の薄葉紙は、博物館収蔵品の避難のための梱包に際し直接的に役立つと思われ、今後も機会をみつけて提供できればと考えている。さらに、シリア側から他の資材提供を望む声があるならば、その要請にも応えていきたいと思っている。

最後に、今回のシリア文化財支援事業が実現することができたのは、偏にご寄付いただいた方々とレバノンでの会議開催に向け孤軍奮闘してくれたジャニン・アブドゥル＝マシーフ博士、シリアの参加者をまとめバイルートに導いてくれたアフマド・ディーブ博士の協力があったからといえる。心から感謝するとともに御礼申し上げます。

西藤 清秀

日本西アジア考古学会会長 /  
奈良県立橿原考古学研究所

Kiyohide SAITO

President, Japanese Society for  
West Asian Archaeology /

Archaeological Institute of Kashihara,  
Nara Prefecture